

絵具の自作(上)

絵具作りの歴史

今日の絵具は絵具メーカーで作られチューブに入っています。この形態は19世紀半ば以降のことです。それまでは違った形で販売されていました。

産業革命時代の粉産業と呼び出して絵具メーカーが登場してきたのは18世紀の後半ですが、それ以前の絵具は画家のアトリエで作られていました。画家といっても今日の画家とは意味合いが異なります。画匠が複数の弟子を擁する工房システムが普通で、画匠を頂点に、高弟から下働きにいたる厳格な段階的身分制度が設けられていました。画匠は免許制度でした。一家を構える画匠になるためには、修業経験を積んで独立しなければなりません。江戸時代の職人制度と何ら変わらない徒弟制度です。図版は工房で絵具を練る様子を表したもので、すが、絵画制作修業の前に若い徒弟の行う仕事は絵具作りでした。



絵具を作る道具

絵具を作る作業で重要なものは、展色材と顔料を一体化させる練り合わせです。日本画だと手のひら程度の小皿の中

で、中指の先端を使って顔料(岩絵具)と膠液を摺り合わせるように練り合わせるだけで絵具が作れるのですが、油彩画の絵具ではそういうわけにはいきません。

図版には底部が平たくなった丸っこい道具と台が描かれています。徒弟はその道具の上に覆いかぶさって、一所懸命に顔料と展色材を練り合わせています。徒弟が握っているものを「練り棒(マラー)」、絵具を練る台を「練り板」と呼び、当時は練り棒に御影石、練り板には大理石が使われていました。

ルネサンス期からバロック期にかけて、油彩画は透明な絵具の層を何層にも重ねて奥行きのある画面をつくる透明技法(グレイズ技法)を発達させてきました。そのため、顔料はほとんど微細化していききました。日本画よりはるかに粒子が細かい顔料と展色材とを練り合わせるためには、展色材の中に顔料を均等に分散させてやらなければなりません。とても、根気と力がかかる作業です。

練り棒、練り板は今日でも市販されています。昔の御影石、大理石に代わり、材料は硬質ガラスです。写真はホルベインの練り棒と練り板です。練り棒の先端には、体重をかけるのに便利なように握り柄がついています。今回は絵具作りの歴史と道具について述べました。次回は実際の絵具作りに入ります。



ホルベインの練り板と練り棒

ホルベイン絵具に関する
ご質問・ご相談は…

ホルベイン絵具 技術サービスセンター TEL.0729 (85) 1223
〒579-8063 東大阪市横小路町4-10-52
電話受付時間/9:00~16:00 月~金曜日(祝日を除く)

holbein

ホルベイン絵具